

詩

石川啄木

青空文庫

啄木鳥

いにしへ聖者が雅典アダンの森に撞つきし、

光ぞ絶えせぬみ空の『愛の火』もて

鑄いにたる巨鐘おほがね、無窮むきゆうのその声をぞ

染めなす『緑』よ、げにこそ霊の住家。

聞け、今、巷あへに喘あへげる塵ちりの疾風はやち

よせ来て、若やぐ生命いのちの森の精の

聖きよきを攻むやと、終日ひねもす、啄木鳥きつつきどり、

巡りて警いましめ告夏樹なつきの髓ずめにきざむ。

往ゆきしは三千年、永劫えいごふなほ猶なほすすみて

つきざる『時』の箭や、無象の白羽の跡

追ひ行く不滅の教よ。——プラトオ、汝が

浄きを高きを天路の栄はえと云ひし

霊をぞ守りて、この森不断の糧かて、

奇くしかるつとめを小さき鳥のすなる。

隠沼

夕影しづかに番つがひの白鷺しらさぎ下り、

槿まぎの葉か枯かれたる樹下こしたの隠沼こもりぬにて、

あこがれ歌ふよ。——『その昔かみ、よろこび、そは

朝あさ明あけ、光ゆりごの揺籃ゆりごに星と眠り、

悲しみ、汝なれこそとこしへ此処ここに朽くちて、

我が喰はみ啣ふくめる泥土ひづちと融とけ沈みぬ。』——

愛の羽寄り添そひ、青瞳せいどううるむ見れば、

築地ついちの草床、涙を我も垂たれつ。

仰あふげば、夕空さびしき星めざめて、

しぬびの光よ、彩あやなき夢ゆめの如ごとく、

ほそ糸ほのかに水底みぞこに鎖くさりひける。

哀歡かたみの輪廻めぐりは猶なほも堪へめ、
 泥土ひづちに似る身ぞ。 ああさは我が隠沼、
 かなしみ喰はみ去る鳥さへえこそ来めや。

マカロフ提督追悼の詩

（明治三十七年四月十三日、我が東郷大提督の艦隊大
 挙して旅順港口に迫るや、敵将マカロフ提督これ之を迎撃
 せむとし、倉さうくわう皇令を下して其旗艦ペトロパフロス
 クを港外に進めしが、武運や拙つたなかりけむ、我が沈設
 水雷に触れて、巨艦一爆、提督も亦また艦と運命を共にし

ぬ。）

嵐もたよ黙やみせ、暗打つばさつその翼、

夜の叫ありそびも荒磯ありその黒潮も、

潮きこくにみなぎる鬼哭しうしうの啾々も

暫しばし唸うなりを鎮しづめよ。万軍の

敵ほこも味方ほこも汝ほこが矛地ほこに伏せて、

今、大水の響に我が呼ばふ

マカロフが名に暫しは鎮まれよ。

彼を沈めて、千古なみの浪狂なみふ、

弦月遠りよじきかなたの旅ゆんこう順口。

ものみな声を潜めて、極冬こくとうの

落日の威に無人の大砂漠

劫ごこふふう風絶ゆる不動の滅の如、

鳴りをしづめて、ああ今あめつちに

こもる無言の叫びを聞けよかし。

きけよ、——敗者の怨うらみか、暗濤の

世をくつがへす憤怒ふんぬか、ああ、あらず、——

血汐を呑のみてむなしく敗艦と

共に没かくれし旅順こくおうりの黒漚裡、

彼が最後の瞳ひとみにかがやける

偉靈のちから鋭どき生の歌。

ああ偉おほいなる敗者よ、君が名は

マカロフなりき。非常の死の波に

最後のちからふるへる人の名は

マカロフなりき。胡天こてんの孤英雄。

君を憶おもへば、身はこれ敵国の

東海遠き日本の一詩人、

敵かたき乍ながらに、苦しき声あげて

高く叫ぶよ、（鬼神ひびも跪ひざまづけ、

敵も味方も汝なが矛地ほこに伏せて、

マカロフが名に暫しは鎮まれよ。
(

ああ偉いなる敗将、軍神の

選びに入れる露西亞の孤英雄、

無情の風はまことに君が身に

まこと無情の翼をひろげき、と。

東亜の空にはびこる暗雲の

乱れそめては、黄海波荒く、

残艦哀れ旅順の水寒き

影もさびしき故国の運命に、

君は起ちたにき、み神の名を呼びて――

亡びの暗やみの叫びの見かへりや、
我と我が威に輝やく落日の
雲路しばしの勇みを負ふ如く。

壯さかんなるかなや、故国の運命を
担になうて勇む胡天こてんの君が意気。

君は立てたり、旅順の狂風に
檣しやうとう頭 高く日を射す提督ていとく旗。——

その旗、かなし、波間に捲まきこまれ、
見る見る君が故国の運命と、
世界を撫なづるちからも海底に

沈むものとは、ああ神、人知らず。

四月十有三日、日は照らず、

空はくもりて、乱雲すさまじく

故天にかへる辺土の朝の海、

(海も狂へや、鬼神も泣き叫べ、

敵も味方も汝が鋒地に伏せて、

マカロフが名に暫しは跪づけ。)

万雷波に躍りて、大軸を

砕くとひびく刹那に、名にしおふ

黄海の王者、世界の大艦も

くづれ傾むく天地の黒漚裡、
血汐を浴びて、腕をば拱こまぬきて、
無限の憤怒、怒濤どたうのかちどきの
渦巻く海に瞳を凝こらしつつ、
大提督は静かに沈みけり。

ああ運命の大海、とこしへの
憤怒の頭擡かしもたぐる死の波よ、
ひと日、旅順にすさみて、千秋の
うらみ遺のこせる秘密の黒潮よ、
ああ汝なれ、かくてこの世の九億劫おくごふ、

生と希望とちから意力を呑み去りて

幽暗不知の界さかひに閉ぢこめて、

如何いかに、如何なる証あかしを『永遠の

生の光』に理示ことわりすぞや。

汝なが迫害にもろくも沈み行く

この世この生、まことに汝なれが目に

映るが如く値のなきものか。

ああ休やんぬかな。歴史の文字は皆

すでに千古の涙にうるほひぬ。

うるほひけりな、今また、マカロフが

おほいなる名も我身の熱涙に。――

彼は沈みぬ、無間の海の底。

偉霊のちからこもれる其胸に

永劫たえぬ悲痛の傷うけて、

その重傷に世界を泣かしめて。

我はた惑ふ、地上の永滅は、

力を仰ぐ有情の涙にぞ、

仰ぐちからに不断の永生の

流転現ずる尊ときひらめきか。

ああよしさらば、我が友マカロフよ、

詩人の涙あつきに、君が名の

叫びにこもる力に、願ねがくは

君が名、我が詩、不滅まことの信とも

なぐさみて、我この世にたたかむ。

水みなづき無月くらき夜よ半の窓に凭より、

燭にそむきて、静かに君が名を

思へば、我や、音なき狂きやうらんり瀾裡、

したしく君が渦巻く死の波を

制す最後の姿をみ観ごとるが如、

頭かうべは垂れて、熱ねつるみ涙せきあへず。

君はや逝ゆきぬ。逝ゆきても猶なほ逝ゆかぬ
その偉おほいなる心はとこしへに
偉おほ霊を仰ぐ心に絶えざらむ。
ああ、夜の嵐、荒磯ありそのくろ潮も、
敵も味方もその額ぬか地に伏せて
火ほ焰のほの声をあげてぞ我が呼ばふ
マカロフが名なに暫しばしは鎮しづまれよ。
彼を沈めて千古の浪狂ふ
弦月遠きかなたの旅順口。

眠れる都

（京に入りて間もなく宿りける駿河台の新居、窓を開けば、竹林の崖下、一望いっぺん麓らしかの谷ありて眼界を埋めたり。秋なれば夜毎に、麓の上は重き霧、霧の上に月照りて、永く山村僻へき陬すうの間にありし身には、いと珍らかの眺めなりしか。一夜興をえて 々筆を染めけるもの乃すなはちこの短調七聯れんの一詩也。「枯林」より「二つの影」までの七篇は、この麓の谷にのぞめる窓の三週の仮住居になれるものなりき）

鐘鳴りぬ、

いと莊嚴おごそかに

夜は重し、市いちの上。

声は皆眠れる都

瞰みおろ下せば、すさまじき

野ししの獅子の死にも似たり。

ゆるぎなき

霧おほなみの巨浪、

白う照る月影に

氷りては市を包みぬ。

港なる百ももふね船の、

その如ごと、燈影洩ほかげもるる。

みおろせば、

眠れる都、

ああこれや、最後をばりの日

近づける血潮の城か。

夜の霧は、墓の如、

ものみなを封じ込めぬ。

百万の

つかれし人は

眠るらし、墓の中。

天地あめつちを霧は隔てて、

照りわたる月かげは

天あめの夢地にそそがず。

声もなき

ねむれる都、

しじまりの大いなる

声ありて、霧のまにまに

ただよひぬ、ひろごりぬ、

黒潮のそのどよみと。

ああ声は

昼のぞめきに

けおされしたましひの

打なやむ罪の唸りか。

さては又、ひねもすの

たたかひの名残なごりの声か。

我が窓は、

濁にごれる海を

遶めぐらせる城の如、

遠寄せとほよに怖れまどへる

詩うたの胸守りつつ、

月光を隈くまなく入れぬ。

東京

かくやくの夏の日はは、今

子午線しごの上にかかれり。

煙突の鉄てつの林はやや、煙皆えん、
煤すすぐろ黒くろき手に

何なにをかも攫つかむとすらむ、
ただ直ひたに天あまをぞ射させる。

ももちあみちまたちまた
百千網 巷 巷 に空車行く音もなく

あはれ、今、都大路に、大真夏光動かぬ

寂せきばく寞よ、霜夜の如く、百万の心を圧せり。

千万の薨いづか今日こそ色もなく打鎮しづまりぬ。

紙の片白き千ひらを撒まきて行く通とほりま魔ありと、

家家の門や又窓まど、黒布に皆とざされぬ。

百千網都大路に人の影暁星の如

いと稀まれに。——かくて、骨泣く寂じやくめつ滅死の都、見よ。

かくやくの夏の日は、今

子午線の上にかかれり。

何方いづかたゆ流れ来ぬるや、黒星よ、真北の空に

飛ぶを見ぬ。やがて大路の北の涯はて、天路そそに聳る

層楼の屋根にとまれり。唾あ唾あとして一声、——これよ

凶まがどり鳥の不浄からすの鳥。——骨あさる鳥なり、はたや、

死の空にさまよひ叫ぶ怨ゑん恨こんの毒どく嘴はしの鳥。

鳥啼なきぬ、二度。——いかに、其声の猶なほ終らぬに、

何方ゆ現れ来しや、幾尺の白髪かき垂れ、

いな光る劍さ捧さげし童顔おきなの翁あり。ああ、

黒長裳くろながも静かに曳ひくや、寂寞の戸に反響こだまして、
 杳くつの音全都に響き、唯一人大路を練れり。
 有りとある磁石の針は

子午線の真北を射せり。

吹角つのはえ

みちのくの谷の若人、牧の子は

若葉衣の夜心に、

赤葉の芽ぐみ物く燻ゆる五月さつきの丘の

柏かしは木立をたもとほり、

落ちゆく月を背に負ひて、

東しのめ白の空のほのめき——

天あめの扉との真白もとき礎もとゆ湧く水の

いとすがすがし。——

ひたひたと木陰こさぢ地に寄せて、

足もとの朝草小露明らみぬ。

風すずはも涼し。

みちのくの牧の若人露ふみて

もとほり心角くだ吹けば、

吹き、また吹けば、

溪たにがは川の石津瀬いはつせはしる水音も

あはれ、いのちの小鼓こつづみの鳴とほの遠音とほねと
ひびき寄す。

ああ静しづこころ心なし。

丘のつづきの草の上へに

白き光のまろぶかと

ふとしも動く物の影。——

凹くぼみかこひの埒かこひの中に寝て、

心うゑたる暁の夢よりさめし

小羊の群は、静かにひびき来る

角の遠音にあくがれて、

埒かこひこえ、草をふみしだき、直ひたに走りぬ。

暁の声する方の丘の辺に。――

ああ^{よろこ}歡びの朝の舞、

新乳^{にひち}の色の衣して、若き羊は

角ふく人の身を繞^{めぐ}り、

すずしき風に啼^なき交^{かは}し、また小躍^{こをど}りぬ。

あはれ、いのちの高丘に

誰ぞ角吹かば、

我も亦^{また}この世の埒をとびこえて、

野ゆき、川ゆき、森をゆき、

かの山越えて、海越えて、

行かましものと、

みちのくの谷の若人、いやさら
に
角吹き吹きて、静心なし。

年老いし彼は商人

年老いし彼は商人。あきびと

靴、くつ かばん 鞆、かはおび 帽子、かはおび 革帯、

ところせく列ならべる店に

坐り居て、客のくる毎、ごと

尽ひねもす日や、はた、電燈の

青く照る夜も更ふくるまで、

てらてらに禿はげし頭を

礼みやあつく千度ちたび下げつつ、

なれたれば、いと滑なめらかに

数数の世辞をならべぬ。

年老いし彼はあき人。

かちかちと生命いのちを刻む

ボンボンの下の帳場や、

簿ぼぎだい記台の上に低たれたる

其その頭、いと面おも白しろし。

その頭低たるる度たびごと毎、

彼が日は短くなりつ、

年こそは重みゆきけれ。

かくて、見よ、髪ひとすぢの一条

落ちつ、また、二条、三条、

いつとなく抜けたり、遂つひに

面白し、禿げたる頭。

その頭、禿げゆくままに、

白壁どぎょうの土蔵どぎょうの二階、

黄金の宝の山は

(目もはゆし、暗やみの中にも。)

積まれたり、いと堆うづたかく。

エジプト
埃及の昔の王は

わが墓の大金字塔を
だいピラミッド

つくるとて、ニルの砂原、

十万の黒兵者を
くろつはもの

二十年も役せしといふ。
はたとせ えき

年老いしこの商人も
あきびと

近つ代の栄の王者、

幾人の小僧つかひて、

人の見ぬ土蔵の中に

きづきたり、宝の山を。

――

これこそは、げに、目もはゆき

あらたよ新世の金字塔ピラミドならし、

たましひ靈魂の墓しるしの標の。

辻

老いたるも、或は、若きも、

幾十人、男女や、

東より、はたや、西より、

坂の上、坂の下より、

おのがじし、いと急せはしげに

此処ここ過ぐる。

今わが立つは、

海を見る広き巷ちまたの

四の辻。——四の角なる

家は皆いと厳いめしし。

銀行と、領事やの館かた、

新聞社、残る一つは、

人の罪か嗅かぎて行くなる

黒犬を飼へる警察。

此処過ぐる人は、見よ、皆、

空高き日をも仰あふがず、

船多き海も眺めず、

ただ、人の作れる路みちを、

人の住む家を見つつぞ、

人ところ群れて行くなれ。

白はくぜん髯おきなの翁も、はたや、

絹きぬがさ傘がさの若き少女をとめも、

少年も、また、靴鳴らし

煙草たばこ吹く海産商も、

丈高たけき紳士も、孫まごを

背せに負おへる瘦やせし媪おうなも、

酒さかぶと肥り、いとそりかへる
商あきびと人も、物乞ふこ兒等も、

口笛の若き給仕も、
家持たぬ憂うき人人も。

せはしげに過ぐるものかな。

広き辻、人は多けど、

相知れる人や無からむ。

並行けど、はた、相逢あへど、

人は皆、そしらぬ身振、

おのがじし、おのが道をぞ

急ぐなれ、おのもおのものに。

心なき林の木木も

相凭^よりて枝こそ交^{かは}せ、

年毎に落ちて死ぬなる

木の葉さへ、朝風吹けば、

朝さやぎ、夕風吹けば、

夕語りするなるものを、

人の世は疎^{まば}らの林、

人の世は人なき砂漠。

ああ、我も、わが行くみちの

今日ひと日、語るとも伴侶なく、

この辻を、今、かく行くと、

思ひつつ、歩み移せば、

けたたまし戸の音ひびき、

右手なる新聞社より

駆け出でし男いくたり幾人、

腰の鈴高く鳴らして

駆け去りぬ、四の角より

四の路おのも、おのみに。

今五月、霽はれたるひと日、

日の光曇らず、海に

牙^{きば}鳴らす浪もなけれど、
急がしき人の国には
何事か起りにけらし。

無題

札^{さつぽろ}幌^{おとっヒ}は一昨日以来

ひき続きいと天気よし。

夜に入りて冷たき風の

そよ吹けば少し曇^{くも}れど、

秋の昼、日はほかほかと

丈タケひくき障しやうじ子を照し、

寝ころびて物を思へば、

我が頭ボーツとする程

心地よし、流離りゅうりの人も。

おもしろき君の手紙は

昨日見ぬ。うれしかりしな。

うれしさにほくそ笑みして

読み了をへし、我が睫毛マツゲには、

何しかも露の宿りき。

生肌ナマハダの木の香くゆれる

函館よ、いともなつかし。

木をけづる木片コツパダイク大工も

おもしろき恋やするらめ。

新らしく立つ家々に

将来の恋人共が

母カアちゃんに甘へてや居む。

はたや又、我がなつかしき

白村ひすゐに翡翠白鯨

我が事を語りてあらむ。

なつかしき我がタイ武ちゃんよ、

今イマヤウ様のハイカラの名は

——

敬慕するかはせみの君、

とつづくに
外国のラリルレ語 ことば

酔漢 エヒドレの語でいへば

m...m...my dear brethren! ——

君が文読み、くり返し、

我が心青柳町の

裏長屋、十八番地

ムの八にかへりにけりな。

世の中はあるがままにて

怎 どうかなる。心配はなし。

我たとへ、柳に南^{かぼちや}瓜

なつた如、ぶらりぶらりと

貧乏の重い袋を

瘦腰に下げて歩けど、

本職の詩人、はた又

兼職の校正係、

どうかなる世の中なれば

必ずや怎かなるべし。

見よや今、「小樽日々」
にちにち

「タイムス」は南瓜の如き

^{つる}蔓の手を我にのばしぬ。

来むとする神かみなづき無月には、

ぶらぶらの南瓜さかの性さがの

校正子、記者ヘアガに経上り

どちらかへころび行くべし。

オトツヒ
一昨日はよき日なりけり。

小樽より我が妻せつ子

朝に来て、夕べ帰りぬ。

札幌に貸家なけれど、

親切な宿の主婦カミさん、

同室の一少年と

猫の糞ふん他室へ移し

この室を我らのために

貸すべしと申出でたり。

それよしと裁可したれば、

明後日妻は京子と

鍋なべ、蒲団ふとん、鉄瓶てつびん、茶盆ちやぼん、

携たづさへて再び来り、

六畳のこの一室に

新家庭作り上ぐべし。

願くは心休めよ。

その節に、我來きし後のちの

君達の好意、残らず

せつ子より聞き候ひぬ。

焼跡の丸井の坂を

荷車にぶらさがりつつ、

(ここに又南瓜こそあれ、)

停車場に急ぎゆきけん

君達の姿思ひて

ふき出しぬ。又其心

打忍び、涙流しぬ。

日高なるアイヌの君の

行先ぞ気にこそかかれ。

ひよろひよろの夷いきび希薇の君に

事問へど更にわからず。

四日前に出しやりたる

我が手紙、未だもどらず

返事来ず。今の所は

一向に五里霧中ごりむちゆうなり。

アノ人の事にしあれば、

瓢へうぜん然と鳥の如くに

何処へか翔かけりゆきけめ。

大^{タイ}したる事のなからむ。

とはいへど、どうも何だか

気にかかり、たより待たるる。

北の方旭川なる

丈高き見習士官

遠からず演習のため

札幌に来るといふなる

たより来ぬ。豚鍋つき

語らむと、これも待たるる。

待たるるはこれのみならず、

願くは兄弟達よ

手紙呉くれ。ハガキでもよし。

函館のたよりなき日は

何となく唯我一人

荒れし野に追放されし

思ひして、心クサクサ、

訳わけもなく我がかたはらの、

猫の糞しやく癩しやくにぞさわれ。

猫の糞かはいさう可哀相なり、

鼻下の髯、二分程のびて

物いへば、いつも滅茶苦茶、

今も猶無官なほの大夫、

実際は可哀相だよ。

札幌は静けき都、

秋の日のいと温かに

虻あぶの声おとづれ来なる

南ミナミマド窓、うつらうつらの

我が心、ふと浮気ウハキダ出し、

筆とりて書きたる文はフミ

見よやこの五七の調よ、

其昔、髯のホメロス

イリヤドを書きし如くに

すらすらと書きこそしたれ。

札幌は静けき都、夢に來よかし。

反歌

白村が第二の愛児マナゴ笑むらむかはた

泣くらむか聞かまほしくも。

なつかしき我が兄オトドヒ弟よ我がために

文かけ、よしや頭搔かかずも。

北の子は独逸ドイツ語習ふ、いざやいざ

我が正等タダシラよ競クラベゴマ駒せむ。

うつらうつら時すぎゆきて隣室の

時計二時うつ、いざ出社せむ。

四十年九月二十三日

札幌にて 啄木拜

並木兄 御侍史

無題

一年ばかりの間、いや一と月でも

一週間でも、三日でもいい。

神よ、もしあるなら、ああ、神よ、

私の願ひはこれだけだ。どうか、

からだ身体をどこか少しこはしてくれ痛くても

かま関はない、どうか病気さしてくれ！

ああ！ どうか……

真白な、やは柔らかな、そして

身体がフウワリと何処までも——

安心の谷の底までも沈んでゆく様な布団ふとんの上に、いや

養老院の古畳の上でもいい、

何も考へずに（そのまま死んでも

惜しくはない）ゆっくりと寝てみたい！

手足を誰か来て盗んで行っても

知らずにある程ゆっくり寝てみたい！

どうだらう！ その気持は！ ああ。

想像するだけでも眠くなるやうだ！ 今著^きてゐる

この著物を——重い、重いこの責任の著物を

脱^すぎ棄^すてて了^{しま}つたら（ああ、うっとりする！）

私のこの身体が水素のやうに

ふうわりと軽くなつて、

高い高い大空へ飛んでゆくかも知れない——「雲雀だ」
ひばり

下ではみんながさう言ふかも知れない！ ああ！

死だ！ 死だ！ 私の願ひはこれ

たった一つだ！ ああ！

あ、あ、ほんとに殺すのか？ 待ってくれ、

ありがとう神様、あ、ちよつと！

ほんの少し、パンを買ふだけだ、五—五—五—錢でもいい！

殺すくらゐのお慈悲があるなら！

新らしき都の基礎

やがて世界の戦は来らん！

不死鳥フエニックスの如き空中軍艦が空に群れて、

その下にあらゆる都府が毀こぼたれん！

戦は永く続かん！いくさ 人々の半ばは骨となるならん！

然しかる後、あはれ、然る後、我等の

『新らしき都』はいづこに建つべきか？

滅びたる歴史の上にか？ 思考と愛の上にか？ 否、否。

土の上に。然り、土の上に、何の——夫婦と云ふ
 定まりも区別もなき空気の中に
 果て知れぬ蒼き、蒼き空の下に！

夏の街の恐怖

焼けつくやうな夏の日の下に
 おびえてぎらつく軌条レールの心。
 母親の居睡りねむの膝ひざからす下りて、
 肥ふとった三歳みつばかりの男の児が
 ちよこちよここと電車線路へ歩いて行く。

八百屋の店には萎なえた野菜。

病院の窓の窓まど掛かけは垂たれて動かず。

閉とぎされた幼稚園の鉄の門の下には

耳の長い白犬が寝そべり、

すべて、限りもない明るさの中に

どこともなく、芥け子しの花が死し落しち、

生なま木きの棺ひつぎに裂ひ罅びの入る夏の空気のなやましさ。

病身の氷屋の女房が岡持を持ち、

骨折れた蝙蝠傘かうもりがさをさしかけて門を出れば、

横町の下宿から出て進み来る、

夏の恐怖に物言はぬ脚かつけ気患者の葬はうむりの列。

それを見て辻の巡査は出かかった欠呻あくび噛みしめ、

白犬は思ふさまのびをして、

塵溜ごみための蔭に行く。

起きるな

西日をうけて熱くなつた

埃ほこりだらけの窓の硝子ガラスよりも

まだ味気ない生命いのちがある。

正体もなく考へに疲れきって、

汗を流し、いびきをかいて昼寝してゐる

まだ若い男の口からは黄色い歯が見え、

硝子越しの夏の日が毛脛けずねを照し、

その上に蚤のみが這はひあがる。

起きるな、超きるな、日の暮れるまで。

そなたの一生に冷しい静かな夕ぐれの来るまで。

何処かなまめで艶いた女の笑ひ声。

事ありげな春の夕暮

遠い国には戦いくさがあり……

海には難破船の上の酒宴さかもり……

質屋の店には蒼あをざめた女が立ち、

燈火あかりにそむいてはなをかむ。

其処そこを出て来れば、路次の口に

情夫まぶの背を打つ背低い女——

うす暗がりに財布さいふを出す。

何か事ありげな——

春の夕暮の町を圧する

重く淀よどんだ空気の不安。

仕事の手につかぬ一日が暮れて、

何に疲れたとも知れぬ疲れがある。

遠い国には沢山おしよの人が死に……

また政庁おしよに推寄せる女壮士のさけび声……

海には信夫翁あはうどりの疫病……

あ、大工だいくの家では洋燈ランプが落ち、
大工の妻が跳とび上る。

騎馬の巡査

絶間たえまなく動いてゐる須田町の人込ひとごみの中に、
絶間なく目を配って、立ってゐる騎馬きばの巡査——
見すばらしい銅像のやうな——。

白痴の小僧は馬の腹をすばしこく潜くぐりぬけ、
荷を積み重ねた赤い自動車か

その鼻先を行く。

数ある往来の人の中には

子供の手を曳ひいた巡査の妻もあり

実家さとへ金借りに行った帰り途みち、

ふと此この馬上の人を見上げて、

おのが夫の勤労を思ふ。

あ、犬が電車に轆ひかれた——

ぞろぞろと人が集る。

巡査も馬を進める……

はてしなき議論の後（一）

暗き、暗き曠野くわうやにも似たる

わが頭脳の中に、

時として、電いなづまのほとばしる如ごとく、

革命の思想はひらめけども――

あはれ、あはれ、

かの壮さうくわい快かいなる雷鳴らいめいは遂つひに聞え来らず。

我は知る、

その電に照し出さるる

新しき世界の姿を。

そこ其処にては、物みなそのところを得べし。

されど、それは常に一瞬にして消え去るなり、

しかして、この壮快なる雷鳴は遂に聞え来らず。

暗き、暗き曠野にも似たる

わが頭脳の中に

時として、電のほとばしる如く、

革命の思想はひらめけども——

はてしなき議論の後（二）

われらの且かつ読み、且つ議論を闘たたかはすこと、

しかしてわれらの眼の輝けること、

五十年前の露ロシア西亞の青年に劣らず。

われらは何を為なすべきかを議論す。

されど、誰一人、握りしめたる拳こぶしに卓たくをたたきて、

V 《ヴ》 NAROD 《ナロード》：「と叫び出づるものなし。」

われらはわれらの求むるものの何なるかを知る、
また、民衆の求むるものの何なるかを知る、

しかして、我等の何を為すべきかを知る。

実に五十年前の露西亞の青年よりも多く知れり。

されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、

V NAROD ! と叫び出づるものなし。

此^{ここ}処にあつまれる者は皆青年なり、

常に世に新らしきものを作り出だす青年なり。

われらは老人の早く死に、しかしてわれらの遂^{つひ}に勝つべきを知る。

見よ、われらの眼の輝けるを、またその議論の激しきを。

されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、

V NAROD ! と叫び出づるものなし。

ああ、らっふそく 蠟燭はすでに三度も取りかへられ、

のみのもの 飲料の茶碗ちやわんには小さき羽虫の死骸しがい浮び、

若き婦人の熱心に変りはなけれど、

その眼には、はてしなき議論の後の疲れあり。

されど、なほ、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、

V NAROD ! と叫び出づるものなし。

ココアのひと匙さじ

われは知る、テロリストの

かなしき心を――

言葉とおこなひとを分ちがたき

ただひとつの心を、

奪^{うば}はれたる言葉のかはりに

おこなひをもて語らんとする心を、

われとわがからだを敵に擲^なげつくる心を――

しかして、それは真面目にして熱心なる人の常に有^もつかなしみなり。

はてしなき議論の後の

冷めたるココアのひと匙さじを啜すすりて、
そのうすにがき舌したざは触りに
われは知る、テロリストの
かなしき、かなしき心を。

書齋の午後

われはこの国の女を好まず。

読みさしの舶来の本の

手ざはりあらし紙の上に、

あやまちて零^{こぼ}したる葡萄酒^{ぶだうしゆ}の
なかなか浸^しみてゆかぬかなしみ。

われはこの国の女を好まず。

激論

われはかの夜の激論を忘るること能^{あた}はず、
新らしき社会に於^おける「権力」の処置に就^つきて、
はしなくも、同志の一人なる若き経済学者Nと
我との間に惹^ひき起されたる激論を、

かの五時間に互わたれる激論を。

「君の言ふ所は徹頭徹尾煽せん動家どうかの言なり。」
かれは遂つひにかく言ひ放ちき。

その声はさながら咆ほゆるごとくなりき。

若もしその間に卓テ子エのなかりせば、

かれの手は恐らくわが頭かうべを撃ちたるならむ。

われはその浅黒き、大いなる顔の

男らしき怒りに漲みなぎれるを見たり。

五月の夜はすでに一時なりき。

或る一人の立ちて窓を明けたるとき、

Nとわれとの間なる蠟燭ろうそくの火は幾度か揺れたり。

病みあがりの、しかして快く熱したるわが頬ほほに、

雨をふくめる夜風の爽さわかなりしかな。

さてわれは、また、かの夜の、

われらの会合に常にただ一人の婦人なる

Kのしなやかなる手の指環ゆびわを忘るること能あたはず。

ほつれ毛をかき上ぐるとき、

また、蠟燭ろうそくの心しんを截きるとき、

そは幾度かわが眼の前に光りたり。

しかして、そは実にNの贈れる約婚のしるしなりき。

されど、かの夜のわれらの議論に於いては、

かの女は初めよりわが味方なりき。

墓碑銘

われは常にかれを尊敬せりき、

しかして今も猶尊敬す——

かの郊外の墓地の栗の木の下に

かれを葬りて、すでにふた月を経たれど。

實に、われらの会合の席に彼を見ずなりてより、
すでにふた月は過ぎ去りたり。

かれは議論家にてはなかりしかど、
なくてかなはぬ一人なりしが。

或る時、彼の語りけるは、

「同志よ、われの無言をとがむることなかれ。

われは議論すること能はず、

されど、我には何時にても起つことを得る準備あり。」

「彼の眼は常に論者の怯懦を叱責す。」

同志の一人はかくかれを評しき。

然り、われもまた度度しかく感じたりき。

しかして、今や再びその眼より正義の叱責をうくることなし。

かれは労働者——一個の機械職工なりき。

かれは常に熱心に、且つ快活に働き、

暇あれば同志と語り、またよく読書したり。

かれは煙草も酒も用ゐざりき。

かれの真摯にして不屈、且つ思慮深き性格は、

かのジュラの山地のバクウニンが友を忍ばしめたり。

かれは烈はげしき熱をに冒をかされて、病の床よこたに横よこたはりつつ、
なほよく死ににいたるまで譎うはごと話を口ににせざりき。

「今日は五月一日なり、われらの日なり。」

これ、かれのわれに遺のこしたる最後の言葉なり。

この日の朝あした、われはかれの病を見舞ひ、

その日の夕ゆふべ、かれは遂にに永にき眠りに入れり。

ああ、かの広ひたひき額ひたひと、鉄槌てつちゐのごとき腕かひなと、

しかして、また、かの生をを恐れざりしごとく

死をを恐れざりし、常に直視する眼と、

眼まなこつぶれば今も猶わが前にあり。

彼の遺骸ゐがいは、一個の唯物論者ゆゑぶつろんとして

かの栗の木の下に葬まうられたり。

われら同志の撰せんびたる墓碑銘ぼひめいは左の如し、

「われは何時いつにても起たつことを得る準備あり。」

古ふるびたる鞆たもとをあけて

わが友は、古ふるびたる鞆たもとをあけて、

ほの暗くらき蠟燭ろうそくの火影ほかげの散らばへる床とこに、

いろいろの本を取り出だしたり。

そは皆この国にて禁じられたるものなりき。

やがて、わが友は一葉の写真を探しあてて、

「これなり」とわが手に置くや、

静かにまた窓に凭りて口笛を吹き出した^より。

そは美しくしにもあらぬ若き女の写真なりき。

げに、かの場末の

げに、かの場末の縁日の夜の

活動写真の小屋の中に、

青臭くききアセチレン瓦斯ガスの漂ただよへる中に、

鋭くも響きわたりし

秋の夜の呼子の笛はかなしかりしかな。

ひよろろろと鳴りて消ゆれば、

あたり忽たちまち暗くなりて、

薄青きいたづら小僧の映画ぞわが眼にはうつりたる。

やがて、また、ひよろろと鳴れば、

声か唳れし説明者こそ、

西洋の幽いうれい霊ごの如き手つきして、

くどくどと何事を語り出でけれ。

我はただ涙ぐまれき。

されど、そは、三年も前の記憶なり。

はてしなき議論の後の疲れたる心を抱き、

同志の中の誰たれかれ彼の心弱さを憎みつつ、

ただひとり、雨の夜の町を帰り来れば、

ゆくりなく、かの呼子の笛が思ひ出されたり。

——ひよろろろと、

また、ひよろろろと——

我は、ふと、涙ぐまれぬ。

げに、げに、わが心の餓うえて空むなしきこと、

今も猶昔なほのごとし。

わが友は、今日も

我が友は、今日もまた、

マルクスの「資本論キャプタル」の

難解になやみつつあるならむ。

わが身のまはりには、

黄色なる小さき花片はなびらが、ほろほろと、

何故なぜとはなけれど、

ほろほろと散るごときけはひあり。

もう三十にもなるといふ、

身の丈たけ三尺ばかりなる女の、

赤き扇あふぎをかざして踊るを、

みせもの見世物にて見たることあり。

あれはいつのことなりけむ。

それはさうと、あの女は――

ただ一度我等の会合に出て

それきり来なくなりし――

あの女は、

今はどうしてゐるらむ。

明るき午後のもとなきしづごころ静心なま。

家

今朝も、ふと、目のさめしとき、

わが家と呼ぶべき家の欲しくなりて、

顔洗ふ間もそのことをそこはかとなく思ひしが、

つとめ先より一日の仕事をを了へて帰り来て、

夕餉ゆふげの後の茶を啜すすり、煙草たばこをのめば、

むらさきの煙の味のなつかしさ、

はかなくもまたそのことのひよつと心に浮び来る――
はかなくもまたかなしくも。

場所は、鉄道に遠からぬ、

心おきなき故郷の村のはづれに選えらびてむ。

西洋風の木造のさつぱりとしたひと構かまへ、

高からずとも、さてはまた何の飾りのなしとても、

広き階段とバルコンと明るき書齋……

げにさなり、すわり心地いすのよき椅子いすも。

この幾年に幾度も思ひしはこの家のこと、

思ひし毎ごとに少しづつ変へし間取りのさまなどを

心のうちに描ゑがきつつ、

ランプの笠かさの真白きにそれとなく眼をあつむれば、

その家に住むたのしさのまざまざ見ゆる心地して、

泣く児こに添乳そへちする妻のひと間の隅のあちら向き、

そを幸ひと口もとはかなき笑みものぼり来る。

さて、その庭は広くして草の繁るにまかせてむ。

夏ともなれば、夏の雨、おのがじしなる草の葉に

音立てて降るころよき。

またその隅にひともとの大樹を植ゑて、

白塗の木の腰掛を根に置かむ――

雨降らぬ日は其処そこに出て、

かの煙濃こく、かをりよき埃エッジ 及煙草ふかしつつ、

四五日おきに送り来る丸善よりの新刊の

本の頁ページを切りかけて、

食事の知らせあるまでをうつらうつらと過ごすべく、

また、ことごとにつぶらなる眼を見ひらきて聞きほるる

村の子供を集めては、いろいろの話聞かすべく……

はかなくも、またかなしくも、

いつとしもなく、若き日にわかれ来りて、

月月のくらしのことに疲れゆく、

都市居住者のいそがしき心に一度浮びては、

はかなくも、またかなしくも

なつかしくして、何時^{いつ}までも棄^すつるに惜^をしきこの思ひ、

そのかずかずの満たされぬ望みと共に、

はじめより空しきことと知りながら、

なほ、若き日に人知れず恋せしときの眼付して、

妻にも告げず、真白なるランプの笠を見つめつつ、

ひとりひそかに、熱心に、心のうちに思ひつづくる。

飛行機

見よ、今日も、かの蒼空あをぞらに
飛行機の高く飛べるを。

給仕づとめの少年が

たまに非番の日曜日、

肺病やみの母親とたった二人の家にて、

ひとりせつせとリイダアの独学をする眼の疲れ……

見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを。

青空文庫情報

底本：「日本文学全集 12 国木田独歩 石川啄木集」集英社

1967（昭和42）年9月7日初版

1972（昭和47）年9月10日9版

親本：初版本

入力：j.utiyaana

校正：八卷美恵

1998年11月11日公開

2005年12月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

詩

石川啄木

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>